

SHOOTING

照準を合わせる男たち

Part 1

兵士たちは戦場のものすごいストレスに耐えながら、
焦らず、落ち着いて、かつスピーディーに銃の狙いを定めなければならない。
とくにテクノロジーが発達した現代では
“下手な鉄砲数撃ちゃ当たる”などという格言はまったく通用しないばかりか、
こちらの居場所を敵に教えるだけの致命的な行ないとなる。
兵士たちは生き残るため、そして戦いに勝利するため今日も自らの銃に命を託す。

文と構成／コンバットマガジン編集部

M16ライフルを構える海兵隊員。
現在のアメリカ軍ではよりコンパクトなM4カービンが主流となっているが、海兵隊ではフルサイズのライフルに対して絶対的な信頼を寄せており、その証として彼らは歩兵を“インファントリーマン”ではなく“ライフルマン”と呼ぶ。

ベトコンを探せ!

NIGHT HUNTER OPERATION

Part 7

ベトナムの闇夜を明るく照らすものは多数いた。カンボジア国境に近いデルタ地帯で活動する北のゲリラを心底恐怖させたのは第334機甲化部隊の重火器チームが飛ばすファイヤーフライだった。7つのギラギラと輝く目で敵を震え上がらせそこにロケット弾を見舞い、ミニガン、M-60、50口径のマシンガンの銃弾を浴びせかけた。

写真／US Army, US Marine Corps Archive, and DoD
Source/VIETNAM "Spotlight on the Enemy"
by SP5 Mike Marvellino, II Field Force Vietnam, ARMY DIGEST, January 1969

「おーい、おい。どこへ行くんだよ?」
パニックになって恐怖に駆られたホシは、泥人形に向かって低い声でいった。声をかけた相手は、全身泥まみれの同じ部隊の仲間だった。「あいつだよ、あのヘリのライトがイヤなんだ。絶対に、光を浴びたらダメだ」その声の主は、グエン・バンだった。彼は両手、両膝を泥のなかにつかこんだ格好で、オリエンタルリバーの土手にへばりつき、どうにかして少しでも身を隠せる場所に移動しようとしていた。

ホシとグエン・バンと、そのほかの仲間11人で結成したベトコン特攻隊は、つい先ほどまでサンバンに乗り込んで、ゆっくりとオリエンタルリバーを下って隠れ家に戻ろうとしていた。彼らの隠れ家は、サイゴンの町の明かりが見えるところにあった。

川が大きく蛇行しているところまでは、何の問題もなくスムーズに進んできたが、大曲りを回ったとたんに、ファイヤーフライがライトを浴びせかけてきた。ホシたちの特攻隊は真っ青になり立ちつくした。

カンボジア国境沿いにあるベースキャンプを出発して、ほぼ2週間が過ぎていた。目的をほぼ達成して、徒歩による行軍ももうじき終わる。その寸前に、立ち往生してしまった。どちらを向いても、あたり一面、真っ暗な田んぼが広がるなかで、ピンポイントで光を浴びせかけられた。「目標発見」。ジョージ・ボイドー等准尉の声がした。「その場で待機」と、沈黙を破ったその声は、「デッキシップ」のパイロットがインターコム越

しに、仲間に向けて発した声だった。ベトコンは、もはや、孤独ではなかった。部隊と補給物資を運ぶ、彼らの隠密な夜の行動は、3頭の「火炎を吐くドラゴン」によって麻痺してしまった。ドラゴンの正体とは、第334機甲ヘリコプター中隊の重火器部隊のことだ。部隊の3機のヒューイヘリは、歯の根元までガッツリ武装していた。「サンバン1隻とチャーリーを2名発見」と、ボイドが知らせてきた。「より明確な居場所を確認するので、一度上空を通過する」。この言葉を聞いた残りの2機のヒューイは、いつで

も攻撃に移れるように、待機姿勢をとった。投光器役のヘリと管制役のヘリが空中でホバリングしながら旋回するなか、一番下の位置にいたヘリが、樹冠すれすれをかすめるようにして飛び去った。

航空戦力が行なう「サーチ&キル作戦」に関係したドラマは、第334武装ヘリコプター中隊の重火器チームが、ベトナムにいた3年のあいだに

マーブルマウンテン南西で敵の動きが認められたために、UH-1Eを飛ばして、敵の居場所を特定する。その情報を基にして「サーチ&クリア作戦」を実施。



何百回となく繰り返され、「ベトナムで最初にガンを携行した部隊」は、ファイヤーフライのライトが暗闇を照らすなか、さまざまな火器を駆使して攻撃を繰り返した。ギラギラとなめまわす7つの目を

束ねたファイヤーフライは、サンバンの進路を読んで明るく照らし出した。ファイヤーフライが使っていたのは、大型輸送機C-130「フライングボックスカー」が、着陸時にガイドラ

プロジェクトデルタ 偵察マニュアル

Part 2

ベトナムにおける 長距離偵察のA to Z

文／鈴木健太郎

写真／U.S. ARMY, U.S. NAVY,
USAF, USMC, WPPアーカイブ

官給品のカムフラージュスティックを使って顔にペイントを施す第101空挺師団のLRRP隊員。ベトナムで使われたカムフラージュスティックはライトグリーンとローム（暗い緑色）の2色入りで、ペイントは額や頬など光が当たりやすいところに暗い色を使うというルールが一応あったのだが、実際にはほとんど守られなかった。



MACVリーコンドースクールで撮影されたとされるデモンストレーション写真。タイガーストライプ迷彩服を着用し、顔を2色に塗り分けた偵察隊員の装備品にテーピングが施された様子が良く分かる。少し見づらいが、壁にMACVリーコンドースクールでの訓練を修了した者に与えられる記章が描かれているのも興味深い。

個人装備に関する諸注意

- 1 装備品が音を立てることのないようにすべての金具やバックルにテーピングを施すこと。テープは紙製を用いてはならない。
- 2 弾薬ポーチの底に三角巾を入れておけば弾倉を取り出すのが容易になるだけでなく、チームの救急用品の足しにもなる。
- 3 弾薬ポーチの前側の角に1/2インチから3/4インチ（約1.3cm～1.9cm）の切れ込みを入れることで、雨季でも簡単に弾倉を取り出せるようになる。さらにポーチの中の弾倉のうち2本にプルタブを付けておく。そして入手できるのであれば水筒カバーを弾薬ポーチとして用いると良い。通常のポーチよりも多くの弾倉を入れることができ、開けるのが簡単で、大きなスペースを取ることもない。
- 4 M16の発射中にM79グレネードランチャーを紛失することのないように、ウェブベルトとM79を紐かランヤードで結び付けておく。
- 5 URC-10無線機は使用時もハーネスに括り付けておく。もし呼び出し音が鳴った状態で紛失するようなことになれば、バッテリーが切れるまでほかのシグナルが送受信できなくなる（※原文ではURC-10ではなくUPC-10と記されている）。
- 6 パトロール時にはどんな時もナイフを携帯すること。
- 7 スナップリンクはサスペンダーのループにはなくサスペンダー全体を中に通す。
- 8 サバイバル時を想定してサスペンダーのファーストエイドポーチに固形ブイオンと塩、浄水剤をそれぞれ一粒入れておく。固形ブイオンを一つ溶かした水筒があれば、一日か二日は持たせることができる。
- 9 隊員全員が破片、CS（催涙）、WP（白燐）の各種手榴弾を携帯すること。理由は以下の通り。
 - a 破片手榴弾は相手に損傷を与えることができる。
 - b CS（催涙）手榴弾は敵の追手を止めるのに理想的な効果をもたらす。
 - c WP（白燐）手榴弾は絶大な心理的効果があり、催涙手榴弾と同じ使い方ができる。白燐手榴弾と催涙手榴弾を同時に用いることでその効果は倍以上になる。
- 10 煙幕手榴弾はウェブベルトやサスペンダーではなくリュックサックに括り付けるカリュックサックの中に入れる。戦闘中に煙幕手榴弾を使用することはまず考えられず、必要な状況では100パーセントと言って良いほどリュックサックから取り出す時間的余裕がある。



（上）CAR-15を持つSEAL隊員。30連弾倉の底には取り出しやすくするための工夫としてテープで作られたタブが付けられている。ベトナムではこの種のタブのほかにパラシュートコードを用いたループが付けられることもあった。1987年 アメリカ本土。（下左）水筒の水を補給する 空軍コンバットコントローラーの訓練生。腰の水筒カバーの隣に付けられているナイフは海兵隊用ユーティリティナイフで、パイロット用サバイバルナイフと並んで偵察隊員や特殊部隊員に大変人気があったアイテムである。ナイフはもともと別の場所に付けられていたようで、シースにはテープの跡がある。1982年 アメリカ本土。（下） 出撃前の点検を行なう特殊部隊員たち。前に並べられているリュックサックは彼らやCIDGのために日本で調達されたいわゆる現地製品で、北ベトナムに供与されていた中国製リュックサックを真似て作られたこのリュックサックは特殊部隊だけでなく偵察部隊でも大量に用いられた。



UNTOLD SEAMAN BLUES

写真と語り／木村 守（元LST乗組員）
文／吉野文敏 構成／編集部

【最終回】

まだ語られていない
LST船員の記録

1970年3月、サイゴン川を下るLSTの船上から
見慣れた景色を眺めながら「潮時だな」と思った。
航海を終え横浜に帰港すると、退職を申し出た。
手元には5年に渡りカメラを向けてきた
ベトナム各地の膨大な写真が残った。
それは戦時下のベトナムの日常生活の記録であり、
半世紀前に体感した自身の濃密な時間の記憶であった。



最後のブンタウ。大きな仏像があるタウ寺へ向かう乗り合いタクシー。後ろからのカメラに、おばちゃんは顔を隠した。一見のどかな風景だが、道の両側は巨大な米軍基地。車の右前方の白い建物は見張り台、道路沿いには強力な照明灯が立ち並んでいる。



第194回 [現用米軍装備カタログ] **番外編!**
part 2
2000年代制作の
ハリウッド戦争映画に見る装備特集

●解説 / 松原 隆 ●撮影 / 山崎 学 ●協力ショップ / LAZY CAT、トイソルジャー、TRI'S (旧特工工房) ●協力 / 木島秀邦

**THE EQUIPMENTS
OF THE U.S. FORCE**

SPRINGFIELD ARMORY

る際、やや余裕を残してフロント・サイトが収まる幅の広いスクエア・ノッチが、ターゲットを素早く捉えてくれる。グリップにセットされた大型のマガジン・ウェルは丈夫な金属製。側面にプロディジーの特徴でもあるフルートが追加されている。

ハンマーはSFAスタイルのデルタホール・タイプ。リング・タイプよりも親指の接触面積が広く、確実に操作できるスピード・ハンマーだ。スライド・リリース・レバーはM1911シリーズ70以後引き継がれてきたベーシックなデザインだが、シャーシ側に大きな折り加工を施して、スピー

ーディなアクセスを可能にしている。ワイド・スパーのアンビセフティも、伝統的なスエンソン・タイプながら、後部を後加工で直線状にカット。スピーディな操作と携帯性の向上が図られている。

驚異的なスピードでモデルアップされたWAの2023ニュー・モデル“SFA 1911DS プロディジー4.25”。今後スタンダードな5インチなどのバリエーション展開が期待できるが、まずはコンシールド・キャリア・タイプの4.25を手に入れよう!! 今すぐWA渋谷店にTEL予約を入れれば、何かいいことがあるかもしれないゾ。



インデックス付きのビーバー・テールは、フロント・ストラップに呼応するハイグリップ・タイプ。グリップ・フレーム両サイドにSFAのメダリオンが埋め込まれている。



ビーバー・テール上部は両サイドをシェイプしたナロー・テール・デザイン。

早々にモデルアップされたSFA最新のM1911ハイ・キャパシティ・タクティカル・カスタム『プロディジー』。全体のムードを的確にとらえたWAのニュー・モデルだ。

1911DS PRODIGY 4.25

**TOYGUN
REPORT**

**WESTERN
ARMS**

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
☎ウエスタン アームズ ☎03-3407-5922
<http://www.wa-gunnet.co.jp>

COLT GOVERNMENT M1911A1 MILITARY MODEL

サンド・ブラストとヘアライン・フィニッシュでリアルな外観を再現した究極のM1911A1ミリタリー・モデル!



※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様が異なる場合があります。

ミリタリア・
ラウンダ
アップ!

ベトナム戦争のアメリカ／南ベトナム軍パッチ

Militaria Roundup!

アメリカ軍では各種パッチを海外で製作することが多く、その中には軍正規のデザインではないものも存在する。**Part 1**

中でも種類が多いのはベトナム戦争当時のローカルメイド品だ。

現在では当時の実物はほぼ入手不可能だが、複製品がコレクター向けに製作されており、好みに応じてジャングル・ファティグをはじめとするユニフォームを自由にデコレーションすることが可能だ。

解説／菊月俊之 写真／青木健格 撮影協力／サムズミリタリ屋 <https://www.sams-militariya.com>

ベトナムのアメリカ陸軍

アメリカは1950年代から南ベトナムへの介入を行ない、在ベトナム軍事顧問団（Military Assistance Advisory Group, Vietnam/MAAG）が軍事支援業務を担当した。62年2月にはMAAGへの支援を任務とするベトナム軍事援助司令部（Military Assistance Command, Vietnam/MACV）が設置されたが、政府が戦闘部隊派遣を検討したことで組織改編が行なわれ、64年5月にMAAGはMACVに吸収されている。MACVはベトナム戦争に参加した陸海空軍と海兵隊をその指揮下に置き、アメリカ軍最後の地上部隊がベトナムから去った73年3月29日に活動を停止した。

南ベトナム軍は国土を4つの軍団戦術区域（Corps Tactical Zone）に分けており、アメリカ陸軍は第Ⅰから第Ⅲ軍団戦術区域にそれぞれ軍団規模の野戦軍（Field Force）を派遣したが、第Ⅰ軍団戦術区域は海兵第Ⅲ遠征軍が担当。70年の海兵隊ベトナム撤兵を受けて陸軍第24軍団がその後を引き継いでいる。



ベトナム軍事援助司令部 (MACV)
U.S. MILITARY ASSISTANCE COMMAND, VIETNAM

1962年2月に編成され、ベトナムにおけるアメリカ軍をその指揮下に置いた。その内訳は①在ベトナム・アメリカ陸軍、②第Ⅰ野戦軍、③第Ⅱ野戦軍、④第24軍団、⑤第Ⅲ海兵水陸両用軍団、⑥在ベトナム・アメリカ海軍部隊、⑦空軍第7航空軍、⑧陸軍第5特殊作戦群。



在ベトナム・アメリカ陸軍 (USARV)
U.S. ARMY, VIETNAM

USARVはベトナムにおけるアメリカ陸軍部隊の管理と兵站業務を任務とする部隊で、1966年に編成。第1兵站司令部（1st Logistical command）や第1航空旅団、第18憲兵旅団等の部隊を統括。アメリカ陸軍のベトナム撤兵を受けて72年に活動を停止した。



南ベトナム軍団戦術地区

南ベトナム陸軍はその国土を4つの軍団戦術地区に分け、それぞれに軍団を配備した。アメリカ軍はそれら地区ごとに軍団規模の部隊司令部を置いたが、第Ⅳ軍団戦術地区には配備されなかった。ちなみにアメリカ軍は第Ⅰ軍団戦術地区を“アイ”軍団戦術地区と呼んだが、これはアメリカ兵がローマ数字の“1”をアルファベットの“i”と読み間違えたことに由来する。（U.S. Army）



在ベトナム第1野戦軍 (IFFV)
I FIELD FORCE, VIETNAM

南ベトナムに到着する陸軍部隊を一時的に管理した任務部隊アルファを母体として1966年3月に創設。第Ⅱ軍団戦術地区における陸軍部隊を統括した。アメリカ軍のベトナム撤兵を受け、71年4月に活動を停止。



在ベトナム第2野戦軍 (IFFV)
II FIELD FORCE, VIETNAM

1966年3月に陸軍（第22軍団を母体として）編成。第Ⅲ軍団戦術地区における陸軍部隊を統括。アメリカ軍のベトナム撤兵を受けて1971年5月に活動を停止した。



第24軍団 24th CORPS

1966年3月に陸軍（第22軍団を母体として）編成。第Ⅲ軍団戦術地区における陸軍部隊を統括。アメリカ軍のベトナム撤兵を受け、1971年5月に活動を停止した。

第101空挺師団“スクリーミング・イーグルズ” 101st AIRBORNE DIVISION“SCREAMING EAGLES”

第101空挺師団は第2次大戦中の1942年8月に創設され、ヨーロッパ戦線に派遣。44年6月のノルマンディ上陸作戦、9月の“マーケット・ガーデン”作戦で空挺作戦を実施。44年12月から45年1月の「バルジの戦い」では交通の要衝バストーニュ（ベルギー）を死守して勇名をはせる。ヨーロッパ戦終結後の45年11月に現役部隊としての活動を停止。その後訓練師団として活動再開と停止を繰り返し、54年に現役部隊として活動を再開。56年に戦闘師団として編成された。

1965年7月25日に師団の第1旅団が南ベトナムに派遣され、第25歩兵師団第3旅団、第196歩兵旅団とともにオレゴン任務部隊（Task Force Oregon）を構成。67年11月18日に師団の第2旅団が第1旅団に合流。師団の任務は空挺作戦から空中機動へと移行し、68年8月に第101空挺師団（空中機動）となった。第101師団は第Ⅰ軍団戦術地区で戦い、1969年には映画にも描かれた“ハンバーガー・ヒルの戦い”で北ベトナム正規軍と激戦を展開。師団は71年5月からベトナムを離れ、72年3月10日に師団すべての部隊が本国帰還した。

ローカルメイド・パッチ

ヴェトナム戦争に従軍したアメリカ軍部隊はオリジナルデザインのパッチを現地で製作させたが、それは第101師団も例外ではない。それは隷下連隊の偵察部隊のものが一般的で、ここで紹介した以外にも第506連隊の第2および第3大隊の偵察部隊のものが存在する。また師団章もローカルメイド版が存在しており、フルカラーとサブデュード版のほか、タブの“AIRBORNE”を“VIETNAM”や“CAM RANH BAY（カムラン湾）”に置き換えたバリエーションも作られた。



第101空挺師団 MACV所属
（撮影協力：サムズミリタリ屋/VN戦・ローカルメイド・特殊部隊パッチE/価格1100円）



第502連隊第2中隊・リーコンチーム
（撮影協力：サムズミリタリ屋/VN戦・ローカルメイド・特殊部隊パッチD/価格1100円）



第506連隊LRRP部隊
“SHOCK FORCE”
（撮影協力：サムズミリタリ屋/VN戦・ローカルメイド・特殊部隊パッチG/価格1100円）

第101空挺師団第1旅団戦闘序列（1965～67年）

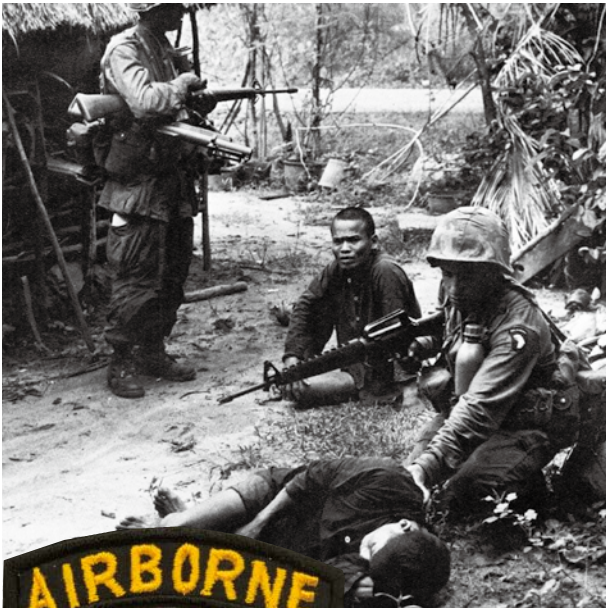
旅団歩兵部隊
第327空挺歩兵連隊第1大隊 第327空挺歩兵連隊第2大隊 第502空挺歩兵連隊第2大隊
旅団砲兵
第302空挺砲兵連隊第2大隊
旅団偵察部隊
第17騎機騎兵連隊第2大隊A中隊
支援部隊
第101支援大隊 第326工兵大隊C中隊 第326医療大隊D中隊 第501通信大隊B中隊 第20化学戦分連隊

ジョーク・パッチ （ノベルティ・パッチ）

第101師団のローカルメイドパッチにはジョーク・パッチが存在する。それは師団シンボルのワシが首絞めされているものと、ワシがニワトリになったものの2種類で、前者は腕に“HERD”の文字が入ったものと、第82空挺師団章が入った腕輪をはめているバリエーションが存在。後者は北ベトナム軍が第101師団を“チキン・メン”と呼んだことに由来するが、“チキン”は英語でいう「弱虫」ではなく、師団章から来たもの。北側は101師団との交戦では大きな損害が出ると認識しており、警戒していたといわれる。

首絞め

（撮影協力：サムズミリタリ屋/VN戦・ローカルメイド・特殊部隊パッチI/価格1100円）



私は誰？

（撮影協力：サムズミリタリ屋/VN戦・ローカルメイド・特殊部隊パッチJ/価格1100円）



※1 1969年に第187空挺歩兵連隊第3大隊と交代
※2 1969年6月に第160航空グループに改編
※3 1969年に第158航空大隊と交代
※4 1969年に第159航空大隊と交代
※5 1969年に第75歩兵連隊A中隊（レンジャー）と交代
※6 1969年に配属



第2回

Text and Photo By Muneki
Samejima Photo by Fiona Zeng

2022 IPSC Pan American Handgun Championship

2022年9月——。海の向こうアメリカで、鮫島宗貴がコンペティティブ・シューターとしての大一番に臨んだ。その試合の名はIPSC北南米大陸選手権。国の代表として参加するレベル4の試合だ。だが、試合開始直後、いきなりのトラブルが鮫島を襲う。2023年2月号の第1回に続く、待望の第2回。

2022のIPSC PAHCを象徴する写真がこちら。スコールの影響で地面は田んぼの様にぬかるみ、シューターたちは泥だらけになってステージ中を駆け抜けた。すさまじいスプラッシュを巻き上げるのは、アメリカ女子代表チームのひとりであるジャネット・ツイー。



ステージ開始前にはROによるブリーフィング各ステージで行なわれる。ここで各ステージの指示、弾数やプロップの作動方法の説明を受けるのだ。

メジャー・マッチの日程

IPSC Pan American Handgun Championship (IPSC PAHC) は、5日間の日程で開催される。ほかのメジャー・マッチだと2〜3日程だが、24ステージを撃つレベル4の試合はさすがに長丁場だ。1日6ステージが4日間続き、最終日はエキシビジョン・マッチであるシュートオフが上位の選手で午前中に開催され、

間半となる。

試合開催レンジであるユニバーサル・シューティング・アカデミーは、過去にIPSCワールドシュート(世界選手権)を始め、数多くのメジャー・マッチを開催しており、僕も馴染みのあるレンジだ。レンジ自体は綺麗で各設備も申し分ないのだが、ひとつ難点がある。このエリア、オレンジ畑以外は本当に何もなし田舎なのだ。毎回苦労するのは“どこに泊まる



IPSCはプラクティカル・シューティング(実践的な射撃)。文字通りに日常生活で考えられる、ありとあらゆるシチュエーションを想定し、訓練することを意識して始まった射撃競技だ。その名残から今でもスタート・ポジションはバラエティに富む。バット、コーヒークップ、フリスビー、釣り竿だけに留まらず、フットボール、ベビーカー、ランドリーバスケットなどなど、ちょっと思い出すだけでもこれだけのアイテムを持ってスタート姿勢を取ったステージがあった。各プロップによって、持ち方や落とし方を考慮しないと、ドロウの際に銃を落としてしまったり、移動中にそれらにつまずき転ぶ危険性もあるため、競技者には瞬間瞬間の判断が求められる。

夕方からは閉会式と表彰式が開催される。試合前日には、イクウィップメント・チェック(使用装備検査)が行なわれるため、移動日を含めると1週間の日程だ。これだけ長い期間をかけて、試合を撃つのは久しぶりだ。ちなみに、筆者の住むアリゾナから試合開催地のフロリダまでのフライトは約4時間。さらに空港からレンジまでは車で移動で約1時

のか? 何を食べるのか?”という点。一番近いホテルのある町まで車で30〜40分。レストランにしてもコロナの影響で閉店したお店も増えており、レンジから20分圏内にあるレストランは、どれもバーガーやファスト・フードのみ。2〜3日なら何とかなるが、1週間となると食べる物にも気を遣わないといけない。幸いにも今回の滞在先は、Airbnb(家の

貸し出しサービス)を利用して、レンジから15分弱の家を安く借りることができた。これなら自炊も可能で体調を整えて試合に挑むことができる。

旅のトラブル

夕方にフェニックスを出発し、オーランドに現地時刻で午前0時頃に到着した僕と仲間のユジンは、早速旅のトラブルに遭遇する……。何と予約していたレンタカー会社が午後11時でクローズしており、予約した車をピックアップ出来ないのだ。飛行スケジュールが約40分の遅延したことが影響した……。多くの場合、空港のレンタカー会社は24時間営業なので、大して気にしていなかったのだが、これには参ってしまった。幸いにも他社で24時間営業のカウンターを見つけることに成功し、何とか車は確保出来たのだが、幸先のよいとは言えないスタートだ。

空港を出発し、目的地が近づくにつれて、車は農家の集まったエリアのど真ん中へと入っていく。鶏や牛、馬が放し飼いで、道路は舗装されておらず完全なオフロード。レンタカーがTOYOTAのSUVだったのが幸いだ。約1時間半の距離を運転し、借りている家に到着。家のゲートの鍵がダイヤル式のロック・ボックスに入っており、それを取り出そうと、事前に家主から教えられたコードにダイヤルを合わせるが、

なぜか一向に開かない! 時刻は午前3時前。この時点で疲れがドッと襲ってくる……。深夜ではあったが、我々の責任ではないので、家を予約したユジンが家主に電話を掛ける。何度目かで家主と話をすることができ、教えられたコードが古いものだったことが発覚。新しいコードを教えてもらい、ようやく家の敷地に入ることが出来た。どうも旅の始まりからトラブルが続く……。 “災難はこれくらいにして、試合では何事もなく無事に乗り切れるといいな——” そんな思いが疲れた頭の中をよぎった。

IPSC/USPSAの基本

到着した翌日、無事に試合へのチェックインとイクウィップメント・チェックを終えた。USPSAの試合では前日に各ステージに入って、ターゲット位置の確認やステージ攻略を事前に練る事が許されているが、IPSCではそれは禁止されている。できる事はステージを外から目視確認するだけであり、実際に立ち入ることは試合開始まで出来ない。USPSAとIPSCの大きなルールの違いだ。また、IPSCは、1-2-3フォーマットと呼ばれるステージ弾数構成を採用している。このフォーマットが意味するのは、ステージの弾数比率だ。6ステージの場合、1ステージをロング(最大32発)、2ステージをミディアム(最大24発)、3ステージをショート(最大12発)で撃つということだ。USPSAの場合もこのフォーマットに違いはないのだが、ルールとしての運営ではなく「推奨する」という形の運営方法だ。

ここで改めてIPSCルールの基本を説明しておこう。この競技では、各ステージで撃った得点をタイムで割るヒット・ファクタ(HF)を競う。5枚のペーパー・ターゲットがあるステージで1枚のターゲットに対して2発を要求される場合、最小弾数は10発(5枚×2発)。1発で得られる

こちらのステージに至っては、両手と両腕を水槽に突っ込んだ状態がスタート姿勢だ。水に浸かった状態から引き抜くため、もちろん両手はビしょ濡れなわけで、その状態で銃を握るのは簡単ではない。人によっては手をスポンで拭く人もいたが、そうすれば当然拭き取る時間が失われる。時間を優先し濡れた手のまま撃つのか、時間はロスするが確実にグリップできるように手を拭うのか——。そういったことも選手それぞれが考え、判断する。これもこの競技の醍醐味だ。



GAS BLOWBACK
MACHINE GUN AKX

古き良き「鋼鉄と木の軍用銃」のフォルムと質感を最新のテクノロジーで細密に再現したAKMから一転、東京マルイ／ガスブロAKの第2弾「AKX」はバリバリに近代化(モダンイズ)された漆黒の実戦仕様。しかも「実銃未採用の新たなインプルーブ(改良)」を大胆に導入!? 世界よ見よ! これぞAKカスタムの完成形だ!

Photo & Text by Takeo Ishii 東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp

8.7インチ・ショートバレル、3ポート・マズルブレイキ、一体型のフロントサイト&ガスブロック、そして細身のM-LOKハンドガードと、贅沢な新規アルミ切削パーツで彩られたフロント部が圧巻! 「3、5、7スロット、3サイズのM-LOK用ピカティニーレール」も付属。

X(=未知)の衝撃!?
超モダン・スタイルに
大変身を遂げた
東京マルイ／ガスブローバック
AK最新モデル、緊急発売!

レシーバーカバーを外すとリアルな内部メカが現われるのはガスブローバックならではの可動部重量約320g (!) のボルトが凄まじい勢いでフルストロークし金属同士が“ガツン!”とぶつかる衝撃が全身を突き抜ける。

東京マルイのドル箱シリーズ「オリジナル・AKショーティ」最新モデル!

AKXはガスブローバックとして初の「オリジナル・AKショーティ」という事になる。ベースとなったのももちろん、メタルレシーバー採用の重厚感と圧倒的なリアリティで皆を驚かせた前作＝AKMだ。

「19mm径シリンダー搭載のモンスターエンジン」が生み出す反動! 実銃で7.62mm弾を撃った時のように肩や頬を“ドッチーン!”と、粗野で荒削りな反動が襲う。また、最終弾を撃ってもボルトがM4のようにホールドオー

ブンせずに再度前進し、最後は空のチェンバーに向かって1回だけハンマーが“カチン!”と落ちて弾切れ、となるリアル・メカニズムを継承している。一方、伝統的でクラシカルだったAKMとは対照的に、外観および操作

系パーツを大胆にモダンイズ(＝現代化)! 銃身長も14.5インチから8.7インチに短縮され機動性が大幅に向上した。最注目目は「AK系最大のウィークポイント」とされていたレシーバーカバーのガタを、「実銃でも採用して欲し



- 全長:548/741mm(※ストック伸展時)
- 銃身(インナーバレル)長:200mm
- 重量:3,550g
- パワーソース:ノンフロン・ガンパワー
- 作動方式:ガスブローバック、可変HOP-UP搭載
- 装弾数:35発
- 価格:82,280円



レシーバーカバー先端とアルミ製ハンドガードの上部後端がガッチリと嵌合!

カチカチとクリックし弛まない機構のダイヤルネジを締め込む事でレシーバーカバーの完全固定とセンター出しを可能にした画期的なシステムが凄い! レシーバーカバー後端にはフリップアップ式のピープ・リアサイトも設置されている。

い!」とさえ思う、シンプルで合理的な構造で完全解消した事だ。ダットサイトやスコープへの対応力&汎用性がグーンと高まり、まさに名実ともに「オリジナルデザインAKの完成型」ともいべきパーフェクトな変身と進化を遂げている。

月刊
THE GREEN BERET vol.50
OLD SKOOL ARCHIVES
10th SFG(A)-CIF
IRAQ2008 オールドスクールアーカイブス
第10特殊部隊グループ-CIF 2008年イラク編
文・写真/DJちゅう 場所/サバゲーパラダイス



Iron Fist 23

アイアンフィスト23【前編】



年間を通し、数多く実施されている日米共同訓練。その中でも日本の安全保障上、喫緊の課題である島嶼防衛強化を成し遂げるために必要不可欠な訓練となっているのが、今年から日本での開催となった、この「アイアンフィスト」だ。実際の島々で繰り広げられた迫真の訓練を追った！

2023年2月16日から3月12日まで、九州・沖縄エリアを舞台として、日米共同訓練「アイアンフィスト23」が行なわれた。コロナ禍による中止はあったものの、毎年行なわれていた恒例の日米共同訓練のひとつだ。しかし、日本や米国で行なわれている日米共同訓練とは趣の異なる訓練となっている。というのも、米海

兵隊から教えを乞い、日本版海兵隊を育成し、島嶼防衛を強化する、という独自の目標を掲げているからだ。冷戦終結とともに、世界は平和が訪れることを熱望するも、良かれ悪しかれ大国によって築かれた秩序が崩壊したことによって、テロや地域紛争が渦巻く時代を迎えた。そんな中、アジアでは、中国が覇権主義的の海洋進出を

進めていき、南シナ海から東シナ海へと勝手にテリトリーを広げていったことで、尖閣諸島を筆頭に、日本の南西諸島部が脅かされる事態となる。そこで、2000年頃より、陸上自衛隊は島嶼防衛強化を打ち出した。そのひとつの手段として、2002年3月、西部方面普通科連隊を新編した。この部隊は“敵が侵攻した島々へ渡り

ゲリラ戦を展開して奪還する”という陸自初のコンセプトを掲げている。そのためには、海から島へと渡る水陸両用戦能力が必要不可欠だ。しかし、日本にはそのノウハウがない。そこで、米海兵隊から学ぶことになった。それが2005年よりスタートした「アイアンフィスト」である。第1回目から米本土にあるキャン

プベンドルトン(カリフォルニア州)にて、第1海兵機動展開部隊とともに訓練をしてきた。それは、迷彩服や装備を身に着けたまま泳ぐ「着装泳」や「ボート操法」など、米海兵隊にとって基本的な戦術から始まり、水陸両用車AAV7やMV-22Bオスプレイを使った着上陸訓練まで徐々にステップアップしていった。

その結果、2018年に水陸機動団が創設された。これまであった西部方面普通科連隊は水陸機動団隷下の第1水陸機動連隊へと改編された。加えて第2水陸機動連隊およびAAV7を配備した戦闘上陸大隊を新編した。今後は部隊のさらなる戦術技量の向上と第3水陸機動連隊の新編を目指していくことになるが、これにて

陸自の水陸両用戦部隊はひとまず完成した。そうした背景もあり「アイアンフィスト」は、日本国内で開催されていくことになった。その新生アイアンフィストの第1回目が、今回実施された「アイアンフィスト23」である。新たなカウンターパートとなったのが、在沖米海兵隊である第3海兵機動展開部隊だ。

日本側も今回から第1空挺団を参加させるなど、より実戦的な内容での水陸両用戦訓練を行なった。さまざまな訓練課目が行なわれていく中、2月18日に日出生台演習場(大分県)で行なわれた訓練が報道公開された。内容はヘリボーンだった。日出生台演習場を「日出生台島」と想定し、そこに展開する敵を制圧